會報

昭和十三年四月　75　日本山岳會

「事務所よりの懐古」補遺

木暮理太郎

前號小島烏水君の「日本山岳會事務所よりの懐古」を面白く讀んだので、僭越ながら私も補遺のやうなものを書いて見たくなつた。しかし同君が書かれたやうに滋味のあるものではないから、畢竟蛇足であり狗尾であることを豫めお斷りして置きたい。

そこで先づ虎の門の名の起りであるが、これには確とした說がない。太田道灌が此門から出軍すると千里ゆくとも無事に千里を歸ると祝して虎の門と名付けたとか、大手御門を城の正面とすれば右の方にあつて白虎の義に叶つてゐる爲だとか、どれも信じ難い說のみである。後には昔朝鮮から虎を獻上したところが其檻が大きくて入らない、それで門を廓大して新に命名したのであると子供だましのやうな說さへ生じた、今となつては尙更わかり兼ねるが、ことによると外の門には赤坂とか喰違とか、それ〴〵適當な地名や俗稱があつたが、此門には無かつたので、正月は寅の月といふし、起工の日がまた寅の日であつた關係から、虎の門と呼ぶやうになつたのではないかとこれは私の想像である。

此所に見附が出來たのは、寛永十三年に江戸城外郭修築の大工事を起した時で、西國四國の諸大名は桝形と石垣、關東奥羽の諸大名は堀と土手の普請を割當てられ、石垣方が六組に堀方が七組で、金澤の前田家や仙臺の伊達家は、流石に大殿樣だけあつて、一組分を一手で普請したが、其他の各組では、割當てられた場所を人數に應じて、更に籤引で各自受持の丁場を定め、工事の難易に就て故障の言ひつこなしといふことに申合せた。

虎の門の桝形を受持つたのは、佐賀城主鍋島信濃守勝茂で、門から東の方六十間許りの間の石垣は、柳川城主立花飛驒守宗茂が受持つたやうである。又西南の方溜池に至る間の石垣は、鳥取城主池田勝五郎（時に七歳、後の相模守光仲）が特に志願して築き上げた。これは從兄の新太郎少將と國替になつたとはいへ、幼少ながら減地もされず元高を給はつたお禮奉公の意味からであつた。石垣の上は內藤家の屋敷で、維新後工部大學が置かれ、大正の震災前までは帝室林野管理局の建物があつた。石垣のほんの一部は、今でも文部省の南の板圍の中に殘つてゐるが、遠からず取除けられさうである。

工事は正月の八日に揃つて着手し石垣の方は大體四月中に、堀の方は二ケ月許り遲れて七月中に竣功した。幸橋からぐるりと西を廻つて、淺草橋に至る間の見附は皆此時に出來上つた。

虎の門の桝形は南から入ると、突當つて西へ拔けるやうになつてゐた。其儘眞直ぐに行けば三年坂に出る、坂の上は道がぐる〳〵曲つてゐるので螺尻（さゝえじり）の名があつた。此坂で轉ぶと三年の中に死ぬから俗稱三年坂といふとは、後からの故事つけらしく、實は寛永十三年に出來たからであらう。三年坂の邊はまた俗に鶯谷とも呼ばれ、鶯の名所であつた。霞ケ關、櫻田、鶯と文字を見た丈でも長閑な光景が浮んで來る。

桝形の上に渡り櫓が建てられたのは、寛永日記にも記事が見當らないので、判然しないけれども、外郭の他の門は寛永十五年から十六年中に建てられてゐるから、虎の門も其頃と見て間違ひはあるまい。それが明曆三年、寛文八年、享保十六年、明和九年と、四度の大火に燒けて、其都度復舊されたのであるが、享保十七年の再建から渡り櫓を廢して冠木門に改めたと瀨田問答に書いてある。しかし明和以後との說もあつて、年代は確でないにしても、冠木門だけで渡り櫓の無かつたことは、明治四年の寫眞が之を證明してゐる。

この寫眞に就て、小島君の言及された蜷川某氏の建白といふのは、其時撮影した寫眞に同氏が說明を加へた、內閣文庫所藏の觀古圖說に藏つてゐる、次手だから左に全文を揭げて置く。

明治四年二月二十三日、左之書を太政官へ差出し候處、同廿七日許可に相成候に付、寫眞を取ること左の如し。

天下の勢、昔時と相反し、城櫓塹溝は、守攻の利易に關せざる者の如く相成、追々破壞、御修繕も無益に屬し候樣有レ之、因て破壞に不二相至一內、寫眞にて其形況を留置度奉レ願候。是は後世に至り、亦博覽の一種にも相成、制度の沿革、時勢の流移も、隨て可レ被二相認一儀に付、御許容被レ下度、此段奉レ伺候。以上

辛未二月　少史蜷川式胤

辨官　御中

伺之通　辨官印

（原文は片假名）

この先見のお蔭で、今は跡方もなくなつた城門の多數が儼然たる昔の面影を傳へてゐる譯である。半藏門などは丁度此時（三月七日）渡り櫓の取壞しに懸る所が撮されてゐる、前から日取りが公示されてゐたので、特に其日を選んだものらしい。

寫眞は一々辨說を施し、第一圖の本丸天守臺附近に始まり、第七十三圖の淺草見附に終つてゐる。馬場先と赤坂の兩門は、誤つて寫眞の種板を粉碎した爲に藏せられなかつたと斷つてある。

明治五年の八月になると、外郭の門は愈撤去といふことになり、十一月から着手して六年中に總て完了した。虎の門は、

虎之門撤却に付、明四日より往來差留候條、此段相達候事

但道而卒業通行差許候節は、尙相達候事。

右之通、大藏省より被ニ相達一候間、市在區々無レ洩可ニ相達一候事。

明治六年十月三日

東京府知事　大久保一翁

簡單なこの布令と共に、一月程の中に永久に姿を消して、

右建物撤却の上は、總て土臺石垣のみを存し、見苦敷體無レ之樣致候見込。

と大藏省が正院に答申した通り、桝形だけが鍋島家で築いた昔の樣に立ちかへつて、明治三十五年頃まで殘つてゐたことは覺えてゐる。其後いつ取り拂はれたか未だ調べて見ない。恐らく三十七年頃であつたらう。

虎の門内の地所は、明治二年三月市中を五十區に分けたとき第二區に編入され、四年十一月に第二大區第一小區となつた、これは小島君の書かれた通りである。但し日比谷公園のある所を霞ヶ關二丁目とされたのは、お見落しであらう。こゝは西日比谷町と内山下町三丁目とに跨つてゐるのだから。

虎の門の位置は、三年坂を下つて眞直ぐ行くと、桝形の西北角に突當つたやうに記憶してゐるので、今の電車道は桝形の中央より西寄りを貫いてゐるらしく、海軍文庫の塀は、東北角を少し斜に掠めてゐるのではないかと思ふ。又現に自動車工業株式會社の敷地に圍込まれてゐるところは、昔の堀跡であることから推せば、東南角の位置も略ぼ見當が付く譯で、小島君の御想像と大差はない。

今入町の地はもと櫻田太左衞門町、同久保町と呼ばれ、江戸開府以來の古い町であつたが、寛政六年の大火に燒けて火除明地となり、其後大的場となつたり、比丘尼屋敷となつたり、維新後は廐屋地にまでなりさがつた。明治二年になつて再び町に復活し、赤坂今井谷町、麻布今井入寺町の居民が移され、翌三年に今入町の新稱を加へ、四年第二大區第二小區となり、六年の改正にも變りはなかつた。明治七年編の東京府志料に據ると、町の戸數八十、人口三百十八人。產物は團扇が主なるもので、製造高四萬八千本、價金九十六圓であつた。一本二厘だから驚くに堪へる。それが九年頃には團扇が三千本減じて、紙嵩一萬五千枚、提灯千八百三十張が加はつた。

琴平町の方はずつと上品な武家屋敷で、電車路に面した北側は、西から順に田中、德永、毛利の三家が並び、田中の後ろに谷家の屋敷があつた。これは寛永頃のことである。其後毛利は丸龜藩の京極家と替り、德永は京極に合併され、京極は更に谷の一部をも加へて、西の堀端まで進出し、其處へ文化の末に金毘羅大權現を本國から勸請したのである。明治二年金毘羅樣は京極家から獨立して、事比羅神社と改稱し、六年府社に昇格した。京極家の屋敷跡は、一時眞田家の邸宅となつたが、五年に明船町や櫻川町などゝ同じく、附近の邸地を合せて新に琴平町と命名され、金毘羅樣の前を虎の門に通ずる新道が開かれた。六年の區法改正の際には、第二大區第四小區に屬し、新道の東側は琴平町二番地であつた。現在事務所のある不二ビルの位置は、勿論京極邸跡の内には相違ないが、或は元の德永邸との境へ少しかゝつてゐるかとも想はれる。

明治三、四年頃は東京の極衰期で旗下の人達は主家と共に多く靜岡に移り、大名小名の家臣も亦本國に引上げ、其邸宅は一邸の外皆上地し、さしも繁昌してゐた東京の地も、明家同前にがらんとしてしまつたから、市民の生活もあがつたりで、政府は小金原の開墾を勸誘したり、市内の空地を拓いて桑茶を植ゑさせたりして、半農半商を立都の方針としやうとした。此時貸付地の拂下値段は、千坪に付き、上等廿五圓、中等廿圓下等十五圓であつたが、それでも買手が少なくて困つたといふ、眞に嘘のやうな話である。其頃百圓も奮發して買かうものなら、今となつて事務所の一つ位、懷手してゐても建つたであらうにと、生れもせぬ昔のことながら聊か殘念なやうな氣もする。（三月二十七日）

× × ×

ウイムパアの刻んだ日本風景に就いて

小島烏水

會報の二月號に、武田久吉氏は、「ウイムパアの刻んだ日本の風景」と題し、山で有名なエドワード・ウイムパア以外にも Josiah J. Whymper なる木板師があつて、日本の風物を木板に彫つてゐる實例を示され、「ウイムパアと署名があるのみでは、それがマツターホルンの勇者であるとは、斷ぜられない」ことを注意せられた。

それは私も、同感で、Edward にしろ、Josiah にしろ、木板の落款は單に Whymper とあるだけだから、ウイムパア卽ちエドワードと、斷言は許さるべきでない。併し、私の揣著「書齋の岳人」中に擧げた「日本漫遊記」なる一書の挿繪は、「挿畫四十五個は、スケッチ及び寫眞に依りて、エドワード・ウイムパアの版刻」と明らかに「エドワード」なるクリスチアン・ネームまで入れてある。だが、私も斷はつた通り、本書は出版年月の記入がなく、どうも後刷らしく思はれるので、或は邪推すれば、後人が恣まにエドワードの名を借して、刷り入れるといふやうな懸念が、全くなしとしなかつたが、幸ひに、此頃初版本を入手したから扉紙を玆に引き寫しにする。

卽ち原本（初版本）に依つても（一）エドワード・ウイムパアと明記してあること、（二）同時代にエドワード・ウイムパアなる同姓名の木版師が、二人存在したる事實を知らないこと、（三）本書の内容は、至つてくだらぬものながら、エドワード・ウイムパアなる名は、マツタアホルンの征服者としても、又木板師として

RAMBLES IN JAPAN

THE LAND OF THE RISING SUN

BY

H. B. TRISTRAM,
D.D, LL. D., F.R.S.
CANON OF DURHAM

WITH FORTY FIVE ILLUSTRATIONS BY EDWARD WHYMPER

FROM SKETCHES AND PHOTOGRAPHS

LONDON

THE RELIGIOUS TRACT SOCIETY

56. PATERNOSTER ROW, AND 65, ST. PAUL'S CHURCH YARD

1895

も、名聲藉甚であつたゝめ、特にエドワード・ウイムパアの名を揭出した、と考へられること、(四)出版年月一八九五年(明治二十八年)には、エドワード・ウイムパア、尙ほ生存中のことだから、英國倫敦で出版された書籍に、エドワードの名を騙用する等のことは、出來得可らざること等を、綜合して考へれば、本書の挿畫が、エドワード・ウイムパアの板刻と明言すること、一向に差支へはないと信ずる。

尤も、武田君は、エドワード以外にも、Josiah なる木板師が、日本の風景を彫つてゐるといふ事實を、示教されたゞけで、私の拙著に、エドワード・ウイムパアと明記したのが惡いと言はれてゐるのではないから、それは別の問題になるが、私自身も、實は、このエドワード・ウイムパアの木版の御手際には、懷疑的で、「肝心の版刻の出來榮えは、如何といふに、アルプスの作などとは、同一人と思はれないほど、不出來である」と、前著で述べてゐる程であるから、ウイムパア社中の、誰某の代作がエドワード・ウイムパア承認のもとに(但し、さういふ考へは、故人に對する冒瀆になつて、怪しからむことではあるが)交つてゐるかも知れないが、それにしても、一部又は全部が、代作だと斷言するほどの、事實の根據が、擧げられないから、反證のない限り、その本の明記する如く、エドワード・ウイムパアの板刻と、認めるより致し方はないと思ふ。

尙ほ原本の裝幀、及び發行年代等に就いて、補正旁々、言ひたいこともあるが、エドワード問題に無關係だから、一切省略する。

× × ×

組の都合で小島さんの御送附になつた「Rambles in Japan」の表紙の寫しを前頁の如くに變更して了ひました。筆者及び讀者の御諒承を乞ふ次第であります。

尙變更箇所は次の通りであります。BY の次の II.B. から F.R.S. まで、WITH から WHYMPER まで、FROM から PHOTOGRAPHS まで、56 から CHURCH YARD までの各々は皆一行になります。

(編者)

山岳寫眞を募る

本年度「山日記」へ山岳寫眞數葉を揭げることゝなりました會員諸氏の優秀作品をお送り願ひます。

1、本邦の代表的山岳景觀
2、大きさ　キヤビネ判以上
3、期日　五月十日
4、山岳名其他解說記入のこと
5、揭載の分には薄謝を呈す
6、返却希望の方は裏面へ朱書のこと

日本山岳會山日記編輯係

山のわらぢ

—信州伊那谷に於ける事例—

向山雅重

平地に於て普通に履いてゐる草鞋は、急峻な山地へ履いて行くと、體の重みのため踵へ力がはいり、踵が右又は左へ草鞋からずれてしまひ易い。これを「横つばきになる」と言ふが、この横履きを避ける爲に「かへり」がついてゐるが、これだけではどうも效果が少い。それでこの踵のずれるのを防ぐ爲に更に一本の「つる」をつけた草鞋が山獵等多く職業的に山へ入る人達によつて用ひられてゐる。「なべづるわらぢ」(上伊那郡宮田村)「つるわらぢ」(上伊那縣美和村)がこれである。

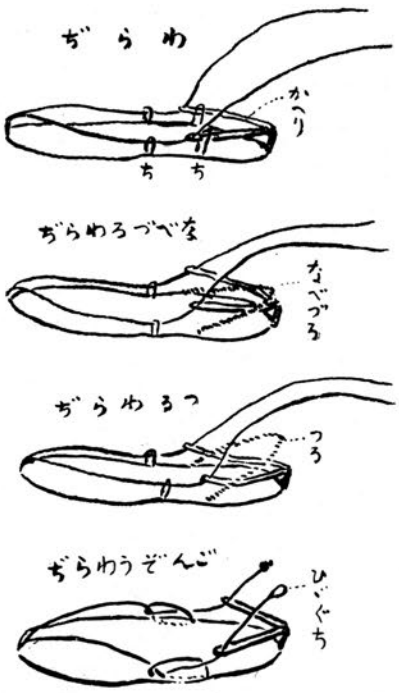
「なべづるわらぢ」は圖の如く「つる」を「かへり」代用になる樣にし「かへり」を長くして、履いた時これが踝の下へかかる樣に工夫したものである。「つるわらぢ」も殆んど同じ樣であるが、この「つる」を後の「ち」の代りになる樣に「かへり」をはさみ、「つる」が大きく踵にかかる樣に工夫されたものである。これらは雪山など獲物を追つて長時間歩くには是非必要な草鞋である。

次に普通の草鞋に於ける「ち」は、藁を縒つたものが外へとび出てゐるだけなので、歩行中に籔などへ引掛つてきれ易いから、これを防ぐ爲に工夫した「どんざうわらぢ」といふものがある。これは「ち」をこしらへずに、前の「ち」にあたる位置から、後の「ち」の位置まで紐を草鞋の中へ作りこんでしまつたものである。これで二つの「ち」の代りをつとめ、これを前へからげ「かへり」へ通して履く。かうすれば絶對に「ち」が絶れる心配がない。尙これは脫いだり履いたりするのに紐を一々結ぶ必要のない樣に「ひびぐち」といふ環を紐の一端につくつて置き、履く時に他の一端を通して丁度自分の足にあふ所で結ひ目をこしらへて、これを一寸通せばよい樣にする。この「どんざうわらぢ」は流木山などに入つて行く人に多く賞用されて居る。

山用には、殊に夏山用には地下足袋が多く利用される樣になつて草鞋は減つたが、雪山には草鞋が是非必要であり、又、流木などの時に水へはいつたり、岩を跳んだりするには草鞋は離されないものであるから、かうした山用の草鞋も今後滅びてしまふ事はないだらうと思ふ。

そして一般の登山用などに山小屋あたりで販賣する草鞋も、多少は高價になつても、かうした山用のものを入念に作つて賣つたならばよいではないかと考へる。普通市販の草鞋は山用として一足で一日は難しいが、入念にこしらへた手作りの草鞋は二日は優に保つのであり、豫備に携帶するにも數が少くて濟み、山用のものは履いて實に具合がよいのである。(一三・二・五)

× × ×



會費の御拂込を願ひます

岩小舎

島田武時

私は山の旅に岩小舎に泊ることがすきだ、それは屹度、私の心に潜む原始的なものへの本能の發露の樣だ。山はだん〳〵設備がとゝのつてもう岩小舎の必要もなくなつたところが多いが谷筋の登山なんかにはまだその必要があるやうだ。

隨分以前涸澤の岩小舎を始めて訪ねたときその岩小舎がそれ以前十年程前に登山界に演じた役割を想つて深い敬愛の念にかられた。

大島さんの「涸澤の岩小舎のある夜のこと」の一文が思ひ出されそして日本の登山史のある一頁がこゝで開かれ、そしてそれが今なほよみつゞけられて居るのを思つたからである。涸澤は現在の樣になつてしまつてからはこの岩小舎も殆んど古典的な存在になつてしまつたがその歴史は不滅である。

横尾の岩小舎、この森の中にある岩小舎は涸澤の岩小舎と關聯して思ひ出される。涸澤の岩小舎が雪に埋れると登山者に愛される小舎だ、屏風岩に面したこの岩小舎は夏は登山者が横目でにらんでとほりすぎて行く、お互に冷淡な顏をして、……岩小舎の一夜に思ひ出すのは槇氏のアイガー東山稜の初登攀に於ける一夜景である。

この露營は岩小舎と云ふより岩蔭といつた方が適切である、私はあの一文をよんで、テニスンのユリシーズの一節にある「求め、苦しみ、しかも屈せず」の意氣をもつて荒涼たる山稜の一夜を送つた四人を想ひ、槇氏を山男中の幸福兒と羨む。

山人の呼ぶ岩小舎には彼等が獲物を追つて谷から尾根をかける一夜の宿をなすに用ふるものには隨分あはれなものがある。笠谷の岩小舎、打込の岩小舎なぞは岩小舎とは呼ぶがそれは大きな岩壁の根であると云ふにすぎない。それは全く雨露さへしのげないものである。しかし私がこゝを訪れたとき、その岩根に燃へのこつた黒い木や、岩にしみついた煤をみて彼等が雪の日、この岩壁の下にたどりつき大きな火を燃し、獲物を抱いて眠る光景を描いた。そしてそれがこの大自然の懐に抱かれて生活する彼等の姿のもつとも良い表現であらうと思つた。

谷筋をとほつて峯を越して行く風雪も、この大岩壁下に眠る小さな人間を見落して行くのであらう。かくして彼等は一夜を暖かくすごすのであらう。

シリスワリの岩小舎、甘酒の岩小舎、奥拔戸岩小舎等は立派な小舎である。それは丁度、構への大きな山家の入口の相である。大地に根おろした姿はたのもしい。廣々とした野呂川、深い金木戸の谷にあるこれ等の岩小舎は清潔である。一年に二三度の大出水がこの岩小舎の床を洗ふとみへて床は砂地である。

床上の焚火のあと、天井の巨岩にこびりついた眞黒な煤、山人との交渉をもつてから凡そ幾時代を經たものであらうか。

岩の割れ目には粗末な手製の杓子、岩魚を燒く木串、皆な黒くなつてさしこんである。私はこんな岩小舎にたどりつくとなんともいへない氣安さを憶へ一夜を過したくなる。そして山人がなす樣に岩魚を釣り、その串で燒き、黒い杓子はそのまゝ飯に使ふ。そして又山人達がする樣に大きな焚火をする。煙は岩の裂目をつたつて流れて行く、焚火のほてりをかんじながら身を横たへる。安らかに一夜を過した翌日はその岩小舎に感謝の念をさゝげていでたつ。

火災の心配はなくともしきたりにしたがつてその岩小舎を整理することを忘れない。杓子や、串等この小舎の主要財産は元通りに裂目にさす。別に洗はなくてもよい樣だ。

焚火のあとのみにくひのはあまりよいものでない。綺麗にならべて自然消火に任す。そして朝日が谷の片側を輝かし、駒鳥がなきたて、行手の谷川の水が朝陽にキラ〳〵ゆらめく谷筋を登つて行く。こんなとき、いきなり渡渉をやらされてもふるへながら爽快だなぞと云ふ。

いつかの晩秋、劔の長次郎澤の岩小舎を訪れた。八つ峯の岩は霧の流れにくろ〳〵と濡れ下半部の岩々の裂目には眞紅の點綴があつた。雪渓は夏の間の岩屑や、泥や、木の葉で汚れて居た。長く使はれないこの岩小屋は冷くしめつて、床には小さな燃へのこりの木屑が二つ三つころがり、眞黒な曲つた針金が一本うちすてゝあつた。あまりにも荒涼な、冷い樣に心いたんだ。私はその一隅に腰をおろし、霧のはれ間に後立山を眺めた。雪渓を吹き下す風は寒い。粉雪がとんだ。私は天候がそんなにひどくならないうちにと劔の頂上を目指した。この岩小舎はだん〳〵人にも忘れられる。

大日岳にも小さいがよい岩小舎があつた。形のよいこの岩小舎の中には煙草色に乾いた偃松が一杯にしきつめてあつた。私はそこに泊る必要もなかつたが荷をおろして休んだ。岩小舎の前は綺麗な草場で、白山イチゲ、深山キンバイ、コメバツガザクラ等が咲き亂れて居た。岩小舎の上に登ると、劔岳の東大谷の山面が素晴しい威容でたちはだかつて居るのが眺められた。

奥黒部の谷には蟹穴の樣に入口がはらばいになつて漸く入られる樣に狹く、内部が廣い良い小舎があると云ふことを聞いたが、私の樣な臆病者は夜中地震でもあつて入口がつぶれて塞がつてしまやしないかと心配になつて困るだらうと思ふ。

赤澤の岩小舎に就いてははつきりした記憶をもつて居る。所謂探險時代にはこの岩小舎、殺生の岩小舎なぞ有名であるが今は立寄る人もないらしいし、私は殺生の岩小舎は現在もあるのか、それとも小舎を建てるためになくなつたのかそれさへ知らない。

ある年の冬、友と三人槍と北鎌尾根の偵察に行つた。一ノ俣小舎に入つたがいつまでたつても止まない吹雪に業を煮やし胸までつかる深雪をラッセルして荷を槍澤の小舎に運んだ。スキーは根雪のない新雪には隨分手間どつて輪樏の方がづつとよかつた。もぐると雪の下になつて充分おさへつけられて居ないくわん木の枝にスキーが引掛つて動けないのである。槍澤小舎で使用する薪まで背負つたのだから思へば豪勇だつた。

夕方岩小舎にたどりつきスキー、ピッケル、薪等を岩小舎に置いて歸つた。そしてその後餘りの降雪續きに今度は登山を斷念して輪樏をはいて登山具の取返しに行つた。

岩小舎の中はすごく荒れて焚火のしやうもなかつた。

吹雪の赤澤岩のあの赤襟の岩壁をひつきりなしに瀧の樣に落ちる新雪雪崩の雪煙の樣はさながら地獄圖繪の樣だつた。（一九三八・一）

エヴエレスト遠征の省察

ヒユー・ラトレッヂ

前號のパーテイの項につづいてポーター、活動、裝備、食糧、將來の項と順次に譯すべきだが、既に本年度の遠征隊がエヴエレストへ向ひつゝある現在、長々と三六年度の回顧でもないと思ひ、活動及び將來の二項を譯出するに止め、これも短くする意味で二三ケ所省略した。今年度の遠征隊は僅七名の小人數である點、この文中にラトレッヂ隊長が禦力主張したエヴエレスト大遠征隊主義とは完全に對蹠的な企てなので、その點からこの一文は注目すべきであり、又檢討に値すべきものと思はれる。

（島田生）

二、活動

一九三六年のエヴエレスト遠征は惡天候に妨げられたが、その遠征の跡を顧み、異つた戰略戰術が好結果を擧げたか否かを省察して見ることは無益ではあるまい。

豫め計畫を樹てるに際して一番の困難は信ずべきデータの不足して居ることだ。エヴェレストへは六度遠征隊が赴いたが、その一つ一つが異つた經驗をして居るので、結局、繰返へされる現象と見られるべきものを對照して見て、選りわけ、それに基いて決斷を下すより外に手がないのである。勿論一番の要因は天候で、その氣まぐれさは熟練した氣象學者をさへ嘆かしめることを思へば、一介の登山家などは、如何とも仕難い力によつてその計畫が無慘に打破られたとしても、見透しが利かなかつた責任を糺斷されることもなからう。

一九三六年の遠征隊中最も經驗に富む隊員達の熟慮の末の意見ではベースキャンプへ早く到着しすぎることは不可だと云ふことだ。その理由は、平常の春季の暴風が過ぎる迄は東ロンバク氷河やノース・コルで非常な勞力を強ひられる結果疲勞が頗る大であることを從來の經驗が裏書きして居るからだ。

常態について吾々が現在知るところでは三月中旬から五月中旬迄の間は激しい北西風がエヴェレスト地方を吹き荒れて居るのが普通で、若し例へば四月一日までのこんな惡狀態にパーテイがベースキンプへ引張られて來たとしたら、非常に困憊し、頂上攻擊に移る前に既に困難に堪へられず、結局は何等建設的な仕事も出來ず、その規律の上に最惡の結果をもたらす荒涼たる環境の中で無爲な生活を强制されることとなり、唯好轉を拱手して待つばかりになるだらう。吾々のパーテイは非常に調子がよく、且高度馴致も甚だ良好なので、一九三三年の際よりも容易により迅速に氷河溯行を實行出來ると豫想された程である前進中の初期にも少し溫暖な天候に惠れたならば、明かに全隊員は頂上攻擊のためにより一層準備されたに違ひなかつた。

こゝで遠征隊の進行振りを年代別に比較して見るのも興味があらう。

	一九二二年	一九二四年	一九三三年	一九三六年
ベースキャンプ到着	五月一日	四月二九日	四月一七日	四月二六日
第一キャンプ建設	五月四日	四月三〇日	四月二一日	四月二七日
第二 〃	五月五日	五月四日	四月二六日	五月二日
第三 〃	五月六日	五月五日	五月二日	五月七日
第四 〃	五月一七—一九日	五月二一日	五月一五日	五月一五日
第五 〃	五月二〇日	六月一日	五月二二日	
第六 〃		六月七日	五月二九日	

一九二二年には第一回及び第二回の攻擊が各々五月二十日と二十四日とにノースコルを出發して行はれ、一九二四年には六月二日と六日とがその日に當り、オデルは北山稜から六月七日と九日の再度にわたり上方へ向つた。一九三三年には五月二十八日及び三十日に攻擊が開始された。

毎回遠征隊は攻擊開始までに激しい困苦をなめさせられた。若しこの困難に阻れなかつたら、勿論成功の機會はより多かつたであらう。いづれの場合でもそのプログラムは天候に禍されて遲延した。例へばノルトンは一九二四年度に、彼の第一回攻擊を五月十七日と豫定して居たのであつた。これらの事實を頭に入れた上、吾々一九三六年度の隊は五月二十三日迄に攻擊位置に就くやうに豫定したが、隊の調子の良好なのと、早春にも拘らず陽氣が嚴しくなかつたので、吾々はこの豫定の日を五月十六日に繰上げた。そして攻擊位置に就くことだけはプログラム通りに出來たのである。實際には、その時には知らなかつたのだが、四月三十日の降雪が完全に北西風に依つて吹拂はれなかつたため、吾々の機會を手始めから潰してしまつたのであつた。

吾々に未來の豫測が出來るものならば、ベースキャンプへ四月の上旬に到着するやうに事を運んだであらうし、さうすれば、降雪前に攻擊することも出來たのである。しかし早く到着したために經驗したみじめさと、又チベット横斷の行旅中、既に山上の惡天候が觀察されたといふ事實とを繰返し述べて置きたい。吾々が適時に最上のコンデイションにあるべきことこれが豫測出來る機會であつた。私の意見では將來の計畫を一九三六年の經驗に基いて樹立することは愚策で、この年は全く變則的な年としなければならない。早く到着し早く作業を開始しすぎることは登攀者を疲勞させるだけでなく破滅させるものだ。

エヴエレストは例へば十月又は十一月のモンスーン後に試みるべきだといふ意見が現在相當支持されて居る。吾々の仲間も多くが、これらの月には風が少いことを度々觀察して居り、ヒマラヤの峰頂中のあるものはこの時分に登られもした。明かな難點は酷寒と日の短いことであるが、これに對しては改良された天幕と防風衣とがそれを凌ぐに足ると論じられて居る。私はこれらの他の山々から類推してエヴエレストを論ずることは危險だと考へる。エヴェレストはより高く且異つた岩層を持つて居るからだ。過去二三年間の經驗によるとエヴェレスト地方では二三、〇〇〇呎以上の雪は少くもモンスーン中は決して通過出來ないことが立證されて居る。では寒い月には果してもつとよい狀態だらうか、私は非常に疑問に思ふ。それは融けることがなく、再凝結しないから、從つてより以上粉雪であるだらうからだ。十月、十一月は比較的無風だからその粉雪が風に固められて居ることは期待出來ない。その上エヴエレスト北面は登攀には是非とも乾燥した岩が必要な性質で、その谷側に傾いたスラブの上の粉雪は克服し難い障害である。一九二一年及び一九三五年

の偵察ではシーズン遲くなつて後の山容を見て居るが、常に深雪に覆はれ、地元のチベットの證左でも、山は冬中そのまゝの姿で、春の烈風が雪を吹き飛ばすまで變らないといふ。私は思ふに、登攀は、春の末とモンスーンの襲來との間のいつものの短い期間を狙つて、モンスーンの到來の遲れる季節に巡り合ふことを願ひながら行ふことに努力を續けねばならぬだらう。

吾々の作戦中次の二つの點が一段の熟考を要する。一つはノースコルより上方に設けられるべきキャンプの數であり、他はそれらの高所キャンプからポーター達を附添ひなしに下山せしめるかどうかの問題である。そしてある程度までこの二つの問題はお互ひに關聯を持つて居ることだ。この兩問題とも三月ガントツクに於ける隊員會議で徹底的に論議されたのである。

ノースコル以上に三ケ所のキャンプを設けることの利點は、まづ第一に登攀者もポーターもキャンプ相互間の運搬が短くて濟むこと、次に恐らくファースト・ステップ直下に、或ひは更に適當な場所が見付かればもつと高所に最高キャンプを設ける好機會に惠まれること、第三には附添なしで下降するポーター達が短距離を下ればよくなり、降路の見透しがきゝ、突發の暴風に見舞れても避難所を得られることである。反對に不利な點を擧げると、より多くの人數が高所へ登らねばならなくなり、そのために餘分の裝備や食料を運び上げねばならず、また登攀隊員はより長い期間山上に留まることを餘儀なくされ、常に危險に曝されることになり、その結果一行の健康が衰へることになる。

ポーターに關しては、一九三三年以來、彼等が二五、七〇〇呎の第五キャンプから二七、四〇〇呎まで荷を運び上げる力を完全に有して居ることが判つた。この際彼等をリードした登攀者の考へでは彼等はファースト・ステップ直下の二七、八〇〇呎まで頑張れるだらうと云ふことであつた。しかし、それでは非常に長い運搬になる。一九三六年にも隊員は彼等の能力に信頼した。要するに彼等は二日に渡つて比較的短い運搬を行つて、その間酷寒と不愉快の一夜を過すよりは、むしろ一日で非常に長い運搬をやる方を好むのである。果して彼等はファースト・ステップから單獨で降りて來られると信頼してよいかどうか。アン・タルキーやリンツインのやうな男は充分出來るとシプトンは考へて居る。第五キャンプから下、及び北山稜のノルトンの舊第六キャンプから下には非常な難場といふのはない。がしかし一九三三年度の第六キャンプへ、またはファースト・ステップへ直接行くルートはそれ程簡單なものではなく殊に惡天候の場合には尙更である。あの一九三三年のわが「タイガー」達すべてが、もしロングランドが居合せなかつたら果して無事に下降出來たらうか。

結局私は簡單とスピードとを尊ぶ上から、從來の二キャンプ案に戻るべきであり、またわれらのポーター達を安全に護らねばならぬといふ廣大な義務から、少くとも第五キャンプ迄は下降に際して登攀隊員一名が附添ふべきであるといふ結論に到達せずには居られないのである。

（次號完結）

一九三三年の攻撃（一）

—エヴェレスト—

"Camp Six" より

吉澤生

夜が明けた時、空はすつかり霽れ渡つてゐた。前夜吾々は朝の五時に出發する事に決めて居たのであるが風が出て寒さが嚴しく迚もそんな事は不可能であつた。假令寒氣には抗し得てもこのエヴェレストの上にあつて風といふものに出られたのでは萬事休すである。

此の按配では迚も前進などは覺束ないと思つてゐた所一時間程過ぎると急に風が凪いで四邊は全く靜まり返つて了つた。—吹いて來ない—吾々は耳を傾けて再び强風の吹き捲くるのを豫期してゐた。が靜寂はその儘續いてゐた。

朝食を攝つて吾々はスリーピングバッグの中から次第に脱け出しやつとの思ひでウインドブルーフを身につけたが全く息は切れるし苦勞な仕事であつた。

吾々の靴は宛で岩を彫刻して作つた樣に硬くなつて了ひ内部は足の濕氣が凍つてギラ〳〵と光つてゐた、私は蠟燭の火にかざして柔げやうとして見たが迚も駄目なので無理矢理に足を突込んで了つたがそれまでには剝き出しの兩手を叩いたりポケットに入れたりして時々休まなければならなかつた。

吾々は有りつたけのもの總てを身に着けた。私はシエトッランドの肌着、厚いフランネルのシャツ重い駱駝のスウェーター、輕いシエットランドのプルオーヴァー六枚、長いシエットランドパンツを二つ、フランネルのズボン、最後に一番上に絹裏附グレンフェルのウインドブルーフ、シエットランドのバラクラヴァとグレンフェル布地のヘルメットが私の頭を護り、足にはシエットランドの靴下四枚をはいた。手袋はいつもエヴェレストでは問題になるのであつて保温と柔軟そして岩にしつくりつくといふ種類のものが工夫されなければならないと思ふ。私は指なしの羊毛と小羊の皮のものを二枚用ひたが可なり保温には役立つた樣である。

食料は各自にケンダルの薄荷菓子で充分であつた。糧食はもつと持つべきが本當であつたろう。然し第六キャンプに於ける止むを得ざる滯在中に强められた食料に對する嫌厭は一層甚しいものであつたのである。それはさて置き吾々は輕い登山綱を携行し其の他に私はいつもの通り小型の「エチュイ」カメラを持つて行つた。——フィルムパックを入れて約百五十匁、陰畫のサイズは三吋半に二吋半である。

七時にテントから出て垂れを締めた。痛ましい限りだがエリックは瞭かにいつもの調子とは違つて居た。テントに著いて以來エリックの攝る食事の分量は私のよりもずつと少なく、而も胃痛に惱まされてゐた。然り賴むと云はれたが之は、若し彼が私より調子がよければ私の方で云つたかも知れない言葉であつた。

雪の詰つた淺いガリーに從つてその儘斜めに登り黄帶（イエローバンド）を横切つて百呎許りは何の事もなく過ぎたが一分か二分毎に呼吸の苦しい爲めに立停つて喘ぎ乍ら氷斧の上に凭れかゝらねばならなかつた。

ガリーが盡きると其處は廣大な岩板となつてゐる。それでも難しい所はなかつた。唯バランスに注意し最も容易なルートを求めればよかつたのだ。然し全體としての黄帶はこゝでスリップをすれば致命的なものとなる傾斜面であつた、殊に登攀者に自分を停止せしむるだけの力が殘つてゐなければ一層危險は增す譯である。幸ひにも吾々の底の廣い、輕く鋲の打つてある靴はよく砂岩にひつかゝつて呉れた。

（續く）

會務報告

三月定例理事會

三月十七日午後六時半、虎の門事務所

出席者、木暮、鳥山、黑田、茨木吉澤、野口、島田、宮崎、早川、石原、中屋、高橋、高頭、木村、

一、山岳編輯報告
一、山日記編輯報告
一、會報編輯に關する件
一、小集會の件
一、關西支部近況報告
一、會計報告
一、役員總會開催の件
一、新入會員詮衡の件

退會者

昭和十三年三月中

一四九一　兵庫縣　楠本幸太郎
一五三五　大坂市　大坂鐵商睦會
一一七五　東京市　荻島雄三
一四九二　埼玉縣　志村寛

會員計報

昭和十三年一月四日逝去
一〇九六　東京市　江南武雄氏

昭和十三年一月十日逝去
一〇三四　東京市　深山東一郎氏

昭和十三年二月二十五日逝去
一六〇一　東京市　小野寺壯介氏

本會は右三氏に對し、玆に謹みて哀悼の意を表す。

新着圖書

登山とスキー　三月號　其社
山小屋　同　朋文堂
地學雜誌　同　東京地學協會
寫眞月報　同　小西六本店
ツーリスト　同　J・T・B
霧の旅　第五一號　霧の旅會
臺灣山岳　第九號　臺灣山岳會
Ladies' Alpine Club 1938
The Geographical Journal 1
Mountaineering Journal 2
Appalachia 2—3
Trail & Timberline 2—3
The Prairie Club 3
The Mountaineer 3
Natural History 2—3
La Montagne 2
Die Alpen 1—3
Rivista Mensile C. A. I. 3—4
De Berggids 2—3
Unione Ligure Escursionisti 1—3
Planinski Vestnik 2
Horolezec 1
S. T. F. Nr. 1—2

會員寄贈圖書

北安蠻郡鄉土誌稿
第五輯民謠童言葉篇　一册
第七輯口碑傳說篇　一册
以上　平林武夫氏

日本民族學會學報　第七
以上　高橋文太郎氏

關西支部より

關西支部室の利用狀況を報告いたします。昭和十二年度下半期の來室者は別表の通りで、同年一ヶ年中の來室利用者總數は千三百人にのぼりました。このうち關西學生山岳聯盟および同先輩クラブ、奈良山岳會、クラブエーデルワイスなどの集會打合會などが開かれたことが二十七回あります。

關西支部室は大阪北區堂ビル筋向ひの大阪貯蓄銀行三階にあり、日曜、祭日を除き毎日午後五時より八時まで開室してゐるのみならず、前記のごとく山岳團體の集會のため無料貸室の便宜を計つてゐますから利用御希望の方は豫め御照會下さい。なほ同室には有志會員の協力による圖書新設資金で購入した山岳書が逐次整備されてゐますから來室閲覽を希望いたします。最近インド測量局發行二五〇萬分の一ヒマラヤ地方圖改訂新版が到着いたしました。

月別	會員	會員外	集會回數	同人員	計
七	四九	三三	〇	〇	八二
八	四五	三一	〇	〇	七六
九	五一	三二	二	二五	一〇八
一〇	五八	三七	三	三八	一三三
一一	五六	四二	三	三九	一三七
一二	四五	三九	三	三二	一一六

會報投稿規定

◇原稿は山岳に關する研究、隨筆、紀行、消息の類に限ります
◇原稿締切　毎月五日
原稿用紙は十六字詰のこと
用紙御希望の方には會から御送りします
◇原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません
◇原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。その他編輯上の一切の事項は編輯係が全責任を負ひます。

昭和十三年四月十五日印刷
昭和十三年四月十六日發行
發行兼編輯者　吉澤一郎
東京市芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所　日本山岳會
電話芝(四五)一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者　植田庄助
印刷所　成文堂印刷所

薫風に豪華の本をひもときぬ

松方三郎著

アルプス記

★内　容—山岳に對する啓蒙的小論及び紀行、隨想、等々。
★挿　繪—寫眞8點・古銅版畫2點・古石版畫2點〔コロタイプ刷〕
★定　價—二圓五十錢・送料十四錢〔四六判・天金〕
外に愛藏版—菊版型、全部特漉日本紙使用。著者署名入。七十冊限定の内殘部7部あり。頒價五圓。
★本書奥付の檢印は松方正義公の落款です。爲念。

川島理一郎著

緑の時代

文部省推薦
圖書館協會推薦

★内　容—「旅人の眼」の續篇、紀行、隨想、文献、等々。
★挿　繪—百二十六點〔著者の素描〕
★定　價—二圓五十錢・送料十四錢〔フールス菊版・天金〕
外に愛藏版—總羊皮裝、著者署名入、限定五十部の内殘部12部あり。頒價五圓。
★お願ひ—「旅人の眼」の初版は定價通り讓りうけます。
★普及版—「旅人の眼」「緑の時代」共に各定價一圓五十錢

ジャヴェル著　〔完譯〕

一登山家の思ひ出

尾崎喜八譯

★内　容—十一章から成る山岳隨想。人間生活の高貴にして豊富なる牧歌。世界山岳人の聖書。
★挿　繪—コロタイプ刷寫眞8點
★定　價—三圓・送料十四錢〔四六版・天金〕
外に愛藏版—總羊皮裝・總和紙本。署名入七十冊の内殘部9部あり。頒價六圓。

龍星閣

東京市芝區新橋際
振替東京五〇六五